

# 現代國語精說

東京高等師範學校教授

日下部重太郎著

## 卷 頭 に

國語及び國語教育は、國民生活全體の上から、國民文化の發展の上から、一般國民が一日もおろそかにしては置かれぬ重大な事であり、特に學者や教育家や經世家は、その進歩發達のために不斷の努力をすべきものである。この國民生活と文化發展との基である國語及び國語教育の興隆のために、國語發達の歴史を探り、先賢の學說と功業とを尋ね、現代國語の状態を明かにし、且つ將來の國語を如何に伸張すべきかを研究すべき諸材料と諸意見とを提供し、國語に關する諸綱目について、これを學術上及び教育上から敘述したいと思ふのが、著者の志してゐる所である。

すべて思想にも事業にも、前の人と後の人とが、網の如く鎖の如く、大木の根幹枝葉の如く相連なり、時代は個人を感化し、個人は時代に影響して、甚だ複雑であり多方多面である。さうして時世は常に展開し、學問は不斷に進歩してゐる。拙著のうち「現代の國語」を刊行してからも既に二十年、「實用漢字の根本研究」を刊行してからも十三年、この間において國語界は年々に進歩して、増修すべき事柄が頗る多く出來た。今や舊稿を取捨し新稿を増大する必要が生じたので、本書をまとめるに至つた次第である。なほ、及ばぬ所や誤つた所については、懇に識者の是正を願つておく。

鈴の屋翁は、國學について「近きほどより開けそめつる事なれば、速かに悉くは考へつくす

べきにあらず、人をへ年をへてこそ、つぎ／＼に明かには成りゆくべきわざなれば、一人の説の中にも、先なると後なると異なることは、もとより有らではえ有らぬわざなり。そは一人の生きの限のほどにも、つぎ／＼明かに成りゆくなり。さればその先のと後のとの中には、後の方をぞその人の定まれる説とはすべかりける。但し又みづからこそ初のをばわろしと思ひて改めつれ、又後に人の見るには、なほ初の方よろしくて後のは中々にわろきも無きにあらざれば、とにかくに選びは、見む人の心になむ。」(玉がつま)と説いておかれた。いかにも翁の諭しの如くである。それで、本書において先賢の説などを引くにも、大概その出所または年次を記しておいた。

西哲の語に「各時代の國民は、その時代だけを考へて活動すべきものでない、常にその時代と過去との關係を考へ、そのうへ將來の時代の利益を現代の犠牲としないやうに心がけねばならぬ。」といふ教訓がある。どうか我等同胞國民は、國のため世のため、このやうな心がけで進んで行きたい。

明治維新の後六十五年、昭和七年の春、

日下部 重太郎 するす。

# 現代國語精説

## 目次

第一序説……………一

國語と國運(一) 現代國語の發達(二) 國語の整理改良の理想と實際(四) 整理改良と愛國心(七) 國語教育の精神(九) 國語教育の方法(二) 大國民の教育(四)

第二 現代國語の發達とその問題……………一七

一 國字問題……………一七

國字問題の由來と國字論の諸相と(一七)

二 漢字節減説一名漢字制限説……………一九

漢字節減説の要旨(一九) 漢字節減説の由來(一九) 國民教育と漢字節用(二〇) 漢字節減の調査と標準(二三) 常用漢字の選定とその使用(二三) 總體の漢字と實用の漢字(二五) 實用漢字の中の常用漢字(二六)

三 假名説一名假名専用説……………二七

假名説の要旨(二七) 假名説の起原(二七) 明治初年の假名説(二八) かなのくわい(二九) 假名の調査と改良(三一) 假名改良の諸案(三二)

四 ローマ字説……………三三

目次

ローマ字説の要旨(三三) ローマ字の傳來(三四) ローマ字説の由來(三五) 羅馬字會(三六) 羅馬字會式(三七) ローマ字の調査(三八) ローマ字ひろめ會(三九) 標準式(四〇) 日本式の團體(四一) 帝國ローマ字クラブ、その他(四二) 國民教育とローマ字(四三) ローマ字調査會(四四)

五 新 字 説

新字説の要旨(四四) 新字説の諸案(四五) 新字説の標準及び批評(四七)

六 假名遣問題

假名遣の名義(四六) 假名遣の沿革(四九) 假名遣問題の由來(五〇) 字音假名遣の改定實施(五四) 假名遣改定の諸問(五五) 臨時假名遣調査委員會(五四) 字音假名遣實施の取消處置(五五) 臨時國語調査會(五七) 假名遣改定案(五七)

七 ローマ字綴り問題

ローマ字綴りの諸式(五九) 初期のローマ字綴り(六〇) ヘボン式から羅馬字會式へ(六一) 標準式(六二) 日本式(六三) 言語學會の意見(六四) その他の諸式(六五)

八 句讀法及び縦書と横書との事

句讀法の由來(六六) 文部省の句讀法案(六七) 横書文の句讀法(七〇) 縦書と横書(七〇)

九 分別書き方の事

分別書き方の名義(七一) 分別書き方の由來(七二) 文部省の分別書き方案(七二)

一〇 送假名法の事

送假名法の由來(七四) 官報局の送假名法(七四) 國語調査委員會の送假名法(七五)

一一 國語整理問題

國語整理の意義(七五) 國語整理を要する事情(七六) 國語整理の來歴(七七) 標準語の基本(七九)

一二 文體及び文法の整理改善……………八〇

文體の意義(八二) 普通文の變遷(八二) 普通文の文法(八五) 文法に許容すべき事項(八六) 口語文の發達と口語法の制定(八八) 言文一致の世の事(九〇)

一三 國語調査の沿革大要……………九三

初期の國語調査(九五) 「かなのくわい」及び「羅馬字會」の調査事項(九四) 言語取調所(九五) 言語學會(九六) 國字改良部と言文一致會の請願と兩院の建議(九六) 國語調査委員(九七) 國語調査委員會とその成績(九八) 臨時假名遣調査委員會(一〇〇) 教育調査會の建議(一〇一) 臨時國語調査會(一〇二) 臨時ローマ字調査會(一〇三)

一四 國語國字問題の將來について……………一〇四

常用漢字と假名の利用(一〇四) 假名遣は本來は發音的(一〇六) 契沖らの偉功(一〇七) 假名遣一新の必要(一〇七) 廣義の音便(一〇八) 音便假名遣の擴張(一一一) 長音の表記法(一一一) 長音符と外國語の寫し方(一一四) じぢずつの區別(一二六) 同音異義の事(一二七) 動詞の活用(一二八) 窮窟な論者(一三〇) 君子の争(一三三) 標準語の辭書(一三三) 古典と外國文學との現代語譯(一三四)

第三 祖 國 語……………一〇四

國語の自主獨立と祖國語(一三四) 祖國語と思想感情(一三五) 漢語に囚はれた考(一三五) 強い國文學(一三六) 言語文章の變遷(一二七) 外來語に對する態度(一三八)

第四 漢 語……………一三〇

一 漢字漢文の和讀……………一三三

漢字漢文の學習(一三〇) 和讀の苦心(一三〇) 國文と字訓(一三一)

二 漢語の採用(一).....一三四

漢語採用の事情(三三) 語形の簡約(三四) 意味の包含(三五) 音韻組織の多種多様(三六) 言語の趣味(三七) 漢學漢文の盛大(三九) 物教の傳播(三九) 法律制度の施行(三九)

三 漢語の採用(二).....一五〇

國語の心髓(四〇) 漢語同化と國語法(四〇) 日英言葉くらべ(四二) アングロ・サクソン語(四二) ノルマンフレ  
ンチ(四三) 日本人と漢語漢文(四三) 日英言葉の相似關係(四四) 漢語の善用と濫用(四八)

四 漢語の發音.....一四九

日本の字音と聲調(四九) 日本の字音の音聲(五一) 拗音が直音にかはるもの(五一) 出氣音がない(五一) 重母音が長母音となるもの(五一) 鼻音の再變(五二) 鼻音の混同(五四) 唇内の入聲が長母音となる(五四) 吳音と漢音(五五) なだらめ(五五) 音便(五七) 唐音(五七) 異義異讀(五七)

五 國民教育と漢語.....一五八

和語癖と漢語癖(五八) 音聲本位(五九) 文字本位(五九) 漢文直譯と漢語同化(五九) 漢語の淘汰(六〇) 言文一致と漢語淘汰(六〇) 國文をよむ心得(六二) 國民教育上の希望(六三)

第五 印度・ヨーロッパ諸國語.....一六四

梵語の傳來(六四) 西洋諸國語の傳來(六五) 諸國語傳來の先後(六六) 西洋語の同化(六六) 祖國語との調和(六九) 西洋語の書き方(七〇)

第六 言文一致.....一七二

一 昔の言文一致.....一七一

上古の口語體(七七) 中古の口語體(七七) 鎌倉時代の口語體(七五) 室町時代の口語體(七五) 江戸時代の口語體(七五) 中正不偏の古文(七六)

二 今の言文一致 ..... 一七六

口語體の唱首(七七) 東京語標準説(七七) 方言調査必要論(七七) 言文一致の替否(七九) 文藝と口語體(七九)  
口語體の進歩(七八) 標準語法制定論(七九) 言文一致會(八〇) 國語調査委員會の調査方針(八〇) 口語法の研究(八〇) 口語體の發展(八二) 國語の一新紀元(八二)

三 言文一致の方法 ..... 一八三

敬語體と帝語體(八三) 標準語法(八四) 標準語と方言(八四) 文章と修辭(八五) 普通用と専門用(八六)

四 國民教育と言文一致 ..... 一八七

寺子屋教育の改革(八七) 小學讀本(八八) 口語體のさきがけ(八八) 中等教育の國語(八九) 國語教育と口語體(八九) 國定小學讀本(九〇) 改正國定小學讀本(九一) 中等教育と口語體(九一) 言文一致の趨勢(九一) 口語文體の優勝(九三)

第七 國語法の心髓 ..... 一九四

一 國語の構文法 ..... 一九四

言語の重要素(九四) 國語の特色(九六) 國語の常態の文の様式(九六) 國語の變態の文の様式(九七) 國語の構文の分類(九八)

二 國語の品詞法 ..... 二〇〇

名詞と數詞と代名詞(二〇〇) 動詞と形容詞(二〇〇) 助動詞(二〇一) 副詞と接續詞と感動詞(二〇一) 助詞(二〇二) 十品詞(二〇二)



三 助辭の解説(一).....二〇三

國語の助辭(一〇三) 助詞の分類(一〇三) 第一類(一〇三) がとはと徒(一〇三) のとつとが(一〇三) きとに(一〇三) へとと(一〇三) よりとから(一〇三) まてて(一〇三) と(一〇三) にてとて(一〇三) その他(一一〇)

四 助辭の解説(二).....二一〇

第二類(一一〇) ぞとなむとこそ(一一一) し(一一三) もとは(一一三) だにとすらとさへとても(一一三) のみとはかりとだけとほどとくらふとしかとほかときり(一一四) などとやとやらとなり(一一四) どのや(一一五) その他(一一五)

五 助辭の解説(三).....二二六

第三類(一一六) ほとならとととからとのととたら(一一七) ともとてもとと(一一六) どとどもとけれどとけれども(一一九) がとものからとものときとものきとにとのに(一二五) てとて(一二〇) その他(一二〇)

六 助辭の解説(四).....二二二

第四類(一二二) やとよ(一二三) かなとかも(一二三) やとか(一二三) やはとかは(一二四) ばやとなむとなとねとがとがもとがな(一二五) かし(一二五) なとな——そ(一二五) なとなあとねとねいとのとら(一二五) その他(一二五) 助詞の轉用(一二七)

七 助辭の解説(五).....二二八

助動詞の分類(一二六) 第一類(一二六) 使役の助動詞(一二六) 受身の助動詞(一二六) 可能の助動詞(一二六) 敬語の助詞の二(一二六) 敬語の助動詞の二(一二七) 敬語の助動詞の三(一二六)

八 助辭の解説(六).....二二九

第二類(一二九) 現在(一三〇) 不定時性(一四〇) 定時性、完了と存在と進行(一四一) 過去(一四二) 未來(一四五) 過去未來(一四七) 時の圖表(一四七)

九 助辭の解説(七).....二四九

第三類(四四) 指定の助動詞(四四) 否定の助動詞(四五) 希望の助動詞(五二) 推量の助動詞(五三) 比況の助動詞(五六) 接尾辭(五七)

一〇 助辭の鍛鍊……………二五八

言語習得の記録(五六) 助辭の鍛鍊(五九) 教材の整理(六一)

## 第八 國語と實用漢字……………二六一

一 漢字の成立……………二六一

東亞住民の常用文字(三三) 漢字の解説(三三) 六書の名目と順序(三三) 定義の見解(三四) 體の分類(三四) 用の分類(三五) 單體と複體(三六) 六書の先後(三七) 解説の異同(三七) 純體の兼體(三六) 會意と諧聲(三六) 字部の變形と略書(三五) 同字と別字(三七) 會意の種類(三七) 諧聲の種類(三七) 諧聲における同字と別字(三七) 諧聲の字音(三七) 諧聲の三注意(三七) 漢字の分類統計(三七) 漢字製作の二大規則(三七) 漢字と假名(三八)

二 漢字の字部……………二七六

漢字の所屬と部首(三七) 漢字と古文明との關係(三七) 字部の名稱(三六) 部首の字形の變體(三六) 異名稱(三六) 相對の名稱(三六) 部首を異にする同字(三四) 混同され易い字部(三五)

三 書體及び字畫……………二八六

書體の變遷(三六) 書體の典型(三六) 國民教育と書體(三八) 字畫の繁簡(三八) 字畫の整理(三九) 永字八法(三九) 部首の錯雜(三九) 常用漢字の平均畫數(三九) 片假名との比較(四二) 永字八法流の筆數計算(四五) 書方と實驗心理(四四) 漢字の索引法(四四)

四 正體と別體……………二九五

正體と別體(四五) 千祿字書の説(四五) 字學七種の説(五六) 和楷正訛の説(五九) 漢字要覽の説(五九) 別體の

分類(三〇一) 書取の成績(三〇二) 誤字の種類(三〇三) 相似字(三〇四) ..... 三〇五

五 總體と實用との字數 ..... 三〇五

漢字の計算(三〇五) 秦漢の漢字(三〇六) 説文以後の漢字書(三〇五) 日本大王篇(三〇七) 和字や安南字など(三〇七) 現今實用の漢字(三〇七) ジャイルズ氏の漢英辭書(三〇八) 上田博士外四氏の大字典(三〇八) 支那の電報用漢字(三〇八) 漢字統一會の同文新字典(三〇九) 重野博士の常用漢字文(三〇九) チェムバレン氏の文字のしるべ(三一〇) 仁科氏の減字私考(三一〇) 安達氏の漢字の研究(三一四) 實用漢字の自然の數(三一五)

六 日本の字音 ..... 三一七

字音の變遷(三一七) 字音の二種四類(三一七) 吳音(三一八) 漢音(三二〇) 唐音(三三〇) 今音(三三〇) 日本字音の錯雜(三三二) 字音の日本化(三三三)

七 日本の字訓など ..... 三三三

日本獨特の漢字用法(三三四) 萬葉用字の法(三三四) 内容から見た字訓の三種類(三三三) 字訓の音韻變化(三三七) 地名や人名などの萬葉流の用字(三三六) 外來語と漢字(三三〇) 同義異讀及び異義異讀(三三二) 讀みの不安定なもの(三三三)

八 和製の漢字 ..... 三三四

會意の和字(三三四) 諧聲の和字(三三七) 偶然的同形(三三六) 二合字(三三六) 餘説(三三九)

九 通俗の漢字使用 ..... 三三九

日本語と支那語との用字比較(三四〇) 日本で事物に當て用ひる漢字(三四二) 和文奇字解(三四二)

一〇 熟語及び常用音義 ..... 三四三

熟語と熟字(三四三) 對話(三四四) 類字成語(三四四) 修飾成語(三四五) 打消成語(三四五) 目的成語(三四五) 助字成語(三四五) 重言(三四六) 文句成語(三四七) 雙聲と疊韻(三四七) 類語の選擇(三四八) 對話の組立(三四八) 三字以上の熟語(三四九) 漢文または支那時文の用字(三四九) 日本での當字(三五〇) 字訓混用(三五〇) 漢字と慣用(三五〇) 専門の研究(三五〇) 日

常實用の音義について(三三三) 音訓の別(三三三) 國語本位(三三三) 字音のみを用ひる字(三四四) 和漢字義の異同(三四四)  
音訓混讀の熟字(三四四) 不安定の熟字(三五五) 熟字の選擇(三五五)

一一 文字から見た國文の種類 ..... 三五六

我が國字(三五五) 漢字を用ひた文章の種類(三五五) 漢字本位の文と假名本位の文(三五七) 振假名の效力(三五九) 振假名と本文との調和(三六一)

一二 送假名の事 ..... 三六一

古人の送假名の不規則(三六一) 官報局の送假名法(三四四) 國語調査會の送假名法(三四四) 送假名に對する希望(三六〇)

一三 國民教育における漢字 ..... 三六〇

義務教育における漢字の沿革(三六〇) (第一期)文部省發行の教科書(三六七) 福澤氏の文字之教(三六九) 文部省の編輯局(三六九) 民撰の小學讀本(三六九)

(第二期) 文部省の編輯書(三七〇) 尋常小學讀本の新出漢字(三七〇) 教科用圖書檢定規則(三七〇) 民撰の小學讀本の新出漢字(三七〇) 節用標準の不確定(三七〇)

(第三期) 文部省令で漢字節用の標準を示す(三七三) 第三號表の批評(三七六) 東京高等師範學校尋常小學國語科實施方法要領の漢字節減(三七七) 漢字の記憶についての實驗(三七九) 漢字の節用と音訓(三八一)

(第四期) 漢字節減の思潮(三八二) 國定小學讀本の新出漢字(三八二) 國定讀本の漢字の批評(三八二) 新出の方法(三八二) 第三號表無權威となる(三八三) 第三號表との比率(三八四) 振假名字の效力(三八四) 漢字選擇の比較(三八四) 漢字の讀數(三八六) 別體の採用(三八七)

(第五期) 義務教育の延長(三八七) 三號表削除の理由(三八七) 字音假名遣と漢字節減(三八八) 國定小學讀本の改正(三八八) 第五期の漢字の批評(三八八) 字數と讀數(三八八) 振假名の利用(三八八) 他教科の漢字(三八八) 學力の優劣と振假名(三八九) 字體の取捨(三八九) 常用漢字と國民教育(三八九) 第二種讀本と第三種讀本(三八九) 字體の事(三八九)

(第六期) 第六期の特色(三九四) 新聞事業と常用漢字(三九四) 臨時國語調査會と常用漢字の選定(三九五) 常用漢字の使用法(三九六)

一四 國民實用の漢字…………… 四〇一

明治初年代の調査と實行(四〇一) 矢野氏の説(四〇二) 郵便報知新聞の漢字制限實行(四〇三) チュムパレン氏の研究(四〇四) 仁科氏の研究(四〇四) 陸軍教授編纂の普通漢字(四〇五) 帝國議會速記録の漢字調べ(四〇六) 邦文タイプライターの漢字(四〇七) 漢字節用の二方針(四〇八) 實用漢字の比較研究(四〇九) 實用漢字審査の參考書(四一〇) 實用漢字の等級(四一〇) 築地活版所の活字個數(四一一) 秀英舎の活版利字(四一二) 實用漢字表の等級標準(四一二) 實用漢字の序列法(四一三)

一五 實用漢字の異體整理…………… 四一三

字體處置の二方針(四一三) 字原主義と進化主義(四一四) 異體整理の要領(四一四) 正體と別體(四一四) 省略字の事(四一五) 添加字の事(四一六) 轉換字の事(四一七) 變換字の事(四一八) 複生字の事(四一九) 分立字の事(四一九) 通用字の事(四二〇) 字體變化の六則(四二一) 異體整理と教科書及び活版事業との關係(四二二) 官民共同の整理事業(四二三)

第九 國語と假名文字…………… 四二六

一 假名文字の發達…………… 四二六

假名の名稱(四二六) 假名の發達第一、漢字借用の時代(四二七) 第二、假名文字發生の時代(四二八) 第三、假名文字が國字となつた時代(四二九) 片假名の字原(四三〇) 平假名の字原(四三一) 假名の使用の沿革(四三二) 假名文停滯の原因(四三三) 近世の假名文字の發展(四三三)

二 假名文改良説と假名専用説…………… 四三六

近世の識者の諸説(四三六) 明治初年代の識者の諸説(四三七) かなのくわいの調査(四三八) 帝國教育會國字改良部の調査(四三九) 國語調査委員會の調査(四四〇)

三 國民教育における假名…………… 四四一

第一期の假名(四四二) 第二期の假名(四四五) 第三期の假名(四四八)

四	假名の種類の問題	.....	四四九
	假名の正體と變體(四四七)	單用説と兩用説(四五〇)	片假名説(四五二)
	平假名説(四五二)	混合假名説(四五三)	
五	假名文の縦書と横書との問題	.....	四五五
	字行の方向の種類(四五四)	読み書きと縦横(四五七)	
六	假名の頭文字の問題	.....	四五八
	頭文字の有無(四五九)	假名の頭文字の諸案(四五九)	
七	假名の字體改作の問題	.....	四六一
	平假名改作説(四六一)	片假名改作説(四六三)	混合假名改作説(四六三)
八	假名のタイプ(字型)の問題	.....	四六四
	縦書・横書と假名の字型(四六四)	假名の字型の改書(四六五)	
九	假名の直立と傾斜との問題	.....	四六六
	印刷の假名と書記の假名(四六六)		
一〇	假名の連續書記の問題	.....	四六七
	連續書記と假名の改良(四六七)	片假名と平假名との比較(四六八)	
第十	國語とローマ字	.....	四六九
	標準式の普及(四六九)	標準式の本質(四七〇)	假名とローマ字(四七〇)
	假名の音圖と對照したローマ字綴り表(四七二)		
	古音と現代音(四七二)	假名遣とローマ字綴り(四七三)	長音の表記(四七三)
	撥音の表記(四七三)	促音の表記(四七四)	g
	音の鼻濁(四七四)	固有名詞などの特別の綴り(四七五)	古音や外來語音や方言音の表記(四七五)
	外國語を綴る諸注意		
	(四七七)	音聲の種類によるローマ字綴り表(四八〇)	

第十一 國語と方言…………… 四二

國語の方言調査(四八〇) 顯著なる音韻分布(四八二) 顯著なる口語法分布(四八三) 方言分布と地理的狀態(四八四) 東部方言と西部方言(四八四) 東條氏の方言區劃(四八五) 方言の研究(四八五) 國語史と方言(四八五) 音聲の方面(四八六) 單語の方面(四八六) 語法の方面(四八七)

附 録

實用漢字等級表

常用漢字表

口語對照動詞活用表

口語對照形容詞及び形容動詞活用表

口語對照助動詞活用表